

長崎県（長崎市）の現地調査概要

- ・長崎県では、度重なる集中豪雨や暴風雨により、長崎大水害（昭和 57 年 7 月豪雨と台風第 10 号）を始めとする土砂災害が多発している。
- ・長崎市太田尾町には、江戸時代の土砂災害を「念仏講」で語り継ぎ、長崎豪雨災害発生時、自主避難に役立てた山川河内（さんぜんごうち）地区がある。
- ・文献調査に基づき、過去の記録が残る地域において詳細情報を収集するため、長崎県長崎市で現地調査を実施した。

調査日：平成 26 年 12 月 18 日（木）

調査地点：長崎県長崎市



▲調査箇所図

出典：国土地理院

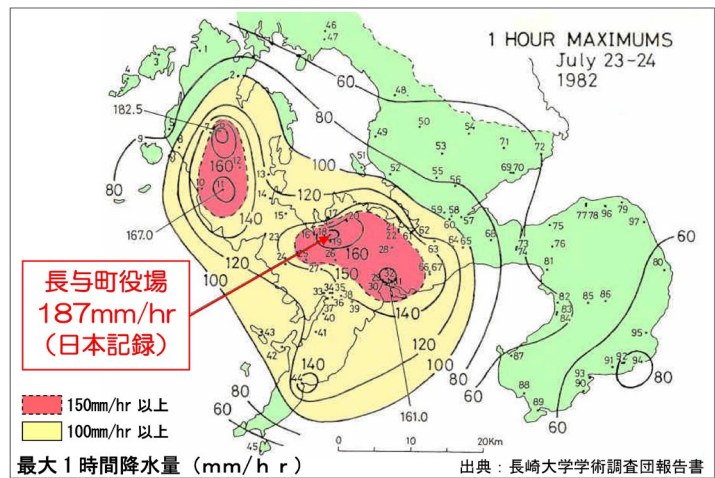
【長崎大水害（昭和 57 年 7 月豪雨と台風第 10 号）の概要】

- ・1982 年(昭和 57 年) 7 月 23 日～25 日にかけて、長崎県南部を中心に記録的な豪雨となり、多数の死者・行方不明者を出した大災害「長崎大水害」が発生した。（全体では 7 月～8 月にかけて続いたとされる）
- ・人的被害は、長崎県で死者 294 名、行方不明者 7 名、大分県で死者 7 名、宮崎県で死者 2 名となった。建物被害は、全壊 584 棟、半壊 954 棟、床上浸水 17,909 棟、床下浸水 19,197 棟、被害額は 3,150 億円に達した。当時の長崎県の当初予算が 4,097 億円であったことを考慮すると、その 77%に当たる資産が数時間のうちに失われたことになる。
- ・その他、崖崩れが長崎市で 583 箇所、長崎県で 4,457 箇所。地すべりが長崎市で 320 箇所、長崎県で 1,292 箇所発生した。

- ・長崎市付近では 1 時間当たり 100 mm 前後の強い雨が 3 時間も降り続いた。西彼杵郡長与町では、7 月 23 日 19 時～20 時の 1 時間に 187 mm の降水量を観測した。これは 1 時間降水量としては観測史上第一位の記録である。

- ・長崎豪雨災害は、土砂災害と河川氾濫による災害の二面性を持ち、犠牲者の約 90% が土砂災害によるものだった。

- ・7 月 23 日 20 時～21 時、河川氾濫によって市街地が冠水し、建物の地下室への浸水被害が生じた。長崎市内の各所で停電し、さらに、ガス管折損によるガス漏れ事故も続発した。土砂崩れ等による死者は、この間に集中している。



▲最大 1 時間降水量図

出典：長崎県 H P



▲国道 34 号(芒塚付近)の大規模崩落の状況

崖崩れや土石流など土砂災害が発生した箇所は、長崎県内で 4,457 箇所にものぼった。

出典：長崎県 H P

提供：国土交通省長崎河川国道事務所



▲ 1 地区で 37 名の方が犠牲となった川平地区の土石流災害（浦上川水系）
出典：長崎県HP



▲ 中島川の氾濫により一部流出した国指定重要文化財の眼鏡橋
出典：長崎県HP

【長崎大水害記念塔：長崎市浜町】

- ・長崎市の繁華街である浜の町（思案橋電停付近）においても、長崎水害により、多大な浸水被害が生じた。河川氾濫により2メートル近く冠水し、逃げ遅れた人は電話ボックスやバス停の屋根に上ったり、電柱にへばりついて必死に難を逃れようとした。
- ・流され出した路線バスの屋根から決死の避難をしたケースもあり、突然の豪雨による出水で逃げ遅れた人は必死の対応を迫られた。
- ・被災から2年後の昭和59年5月、長崎中央ライオンズクラブは、浜の町アーケードと周辺地区の復興の精神をたたえる長崎大水害記念塔を建設した。記念塔には浜町の冠水水位が刻まれている。



▲長崎大水害記念塔の位置（長崎市浜町）



▲浜町の思案橋電停付近にある「長崎大水害記念塔」



■長崎大水害記念塔の碑文

「長崎の大水害は 過去 史誌によれば一六四七（正保四）年より数度にわたり 市民を苦しめた。この度のは一七九五（寛政七）年いらい 実に二世紀ちかくを経ての集中豪雨 異常な体験であった。

あの時 一九八二（昭和五七）年七月二三日 この思案橋跡の地点の水位は一、五七メートル。人も車もものすべてが奔流の底に消えていった。恐怖。打撃。しかし 被災市民はその昔もそうであったように 黙ってつよく立ち上がった。

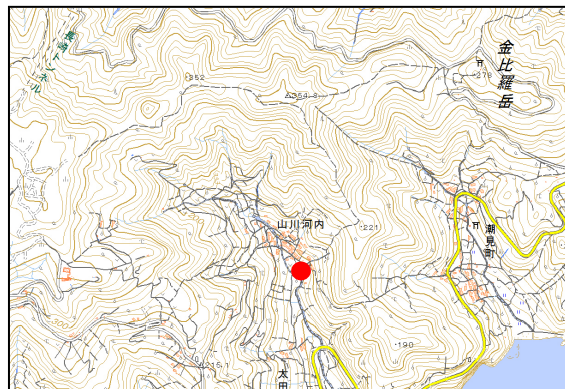
誰をうらむこともない さあ復興だ と。

いま思案橋の街の灯は 更にあかるい。

この塔飾りには 長崎の港から未来に向かって大洋をこえようとする御朱印船を配した。大水害復興の心意気を讃えるためである。（木津義彰撰）」

【150 年毎月続く災害伝承「念仏講まんじゅう」：長崎市太田尾町 ^{さんぜん こうち} 山川 河内 地区】

- ・長崎市太田尾町山川河内地区では、江戸時代末期の 1860 年(万延元年)4 月 9 日(新暦では 5 月 29 日)の朝、大雨による土砂災害が発生し、家屋 7 軒が全半壊、33 人もの犠牲者を出した過去がある。
- ・以来、この地区では、この災害で亡くなられた方々等の供養と災害を忘れないため、遺体の搜索を打ち切った翌日の 14 日を月命日として、毎月 14 日にまんじゅうを持ち回りで全戸に配る地域独特の行事「念仏講」が行われるようになり、150 年以上の間続けられている。



▲長崎市太田尾町山川河内地区の位置

- ・1982 年(昭和 57 年)7 月 23 日の長崎豪雨災害時、隣接する長崎市芒塚(すすきづか)地区では土石流等により 17 人もの犠牲者が生じた。本地区においても河川氾濫や土石流が発生し家屋等に被害を生じたものの、早めに安全な高台等に自主避難し、35 世帯 173 人のうち一人の負傷者も出さなかった。
- ・災害の供養と言って念仏講まんじゅうを配ることにより、過去の災害体験を世代を超えて継承し、地域の土砂災害のリスクを共有してきた。万延元年の土砂災害の伝承が自主避難に活用されたといえる。山川河内自治会は総務省主催の第 17 回防災まちづくり大賞を 2013 年 1 月 23 日に受賞している。



▲流失を免れた水神・山神・土神 (水害後に作り直した石碑)

- ・山川河内地区を流れる逃底川の最下流部の畑には、万延元年の災害の時に流された牛馬を祭る馬頭観音が祭られている。
- ・馬頭観音の前では、お盆の精霊流しのときに、鉦(かね)はり(鉦を打ち鳴らしながら、念仏を唱える仏教の行事)をすることから被災した人馬とも祭られているとも考えられる。



▲馬頭観音が祭られているお堂は石積みの上にコンクリートの屋根がつくられている



▲馬頭観音は三面彫りの石造